

近現代日本のアジア主義に関する一考察 ——征韓論から東アジア地域主義まで (一)

高 埜 健

目 次

はじめに

1. アジア主義とは何か
2. 自由民権運動とアジア主義
3. 国権主義・対外進出とアジア主義
4. コスモポリタン型アジア主義
(以上、今号)
5. 滔天と孫文
6. 現代アジア主義へのインプリケーション

おわりに

参考文献・資料一覧

(以上、次号)

はじめに

今世紀に入って、ちょっとした——静かな、あるいは隠れた、というべき——「アジア主義」の、あるいは「アジア主義再来」のブームが起きているのではないかと思う¹。テレビニュース番組のコメンテータとして活躍する気鋭の大学教授がその名も『アジア主義』²という本を出すのみならず、中国からの留学生がアジア主義をテーマに博士論文³を書き、またドイツやポーランド出身の研究者が日本の大学でアジア主義について研究し、教えている⁴。はたまた何かと物議を醸す

¹ その先鞭をつけたのは松本健一 [松本 2000] や井上寿一 [井上 2006] であったといえよう。

なお、本稿において人名は、故人と存命中とを問わず、全て敬称略としている。

² [中島 2014]。

³ [劉峰 2013]。

⁴ See [Saalar and Koschmann (eds.) 2007], [スピルマン 2015]。

社会派の漫画家が『大東亜論』なる三部作を刊行する⁵。しかし、筆者自身も含め、これらの研究者や作家はみな戦後世代に属し、いわゆる戦前戦中のアジア主義（とその暴走）を肌で感じたことはないはずである。だから、これらの研究者の問題関心の一つは、21世紀も第2十年期(decade)半ばを過ぎた現在、アジア主義という考え方（思想・信条、イデオロギー、運動）は果たして世界的に見て、また当のアジア諸国民にとって、なかんずく私たち日本人にとって意味があり有効性を保ち得るのだろうか、という点にあると思われる。

勿論、筆者の問題意識もそこにある。本稿の目的は、かつて19世紀半ばから20世紀前半まで、日本において興隆し、また日本以外のアジア各国においても一定の社会的・文化的・政治的勢力を保った「アジア主義(汎アジア主義/大アジア主義)」(Asianism, Pan-Asianism, Great(er) Asianism, etc.)を現代的な文脈で解釈・理解し、21世紀の今日におけるその有効性を問うことにある。

明治維新からちょうど150年、この間の歴史を振り返ってみれば、日本にアジア主義の波は2回ないし3回訪れたといえるのではないか。第一は上述の明治から第二次世界大戦中までのアジア主義であり、それは無謀ともいえた大東亜共栄圏建設の失敗と共にいったん歴史の表舞台から姿を消す。この第一の波については次節以降で詳述する。第二の(小さな)波は、戦後1950年代からの戦後賠償プロジェクトに始まった、高度経済成長と軌を一にする日本のアジア回帰(日本のアジアへの経済的再進出)であった。1972年9月の日中国交回復がもたらした「中国ブーム」や日中友好ムードもそれに拍車をかけた。しかし、次第にそれは、「アジア太平洋」という地域的な括りの特徴としていくようになった。1970年代から80年代にかけて「21世紀はアジア太平洋の時代」という謳い文句がメディア、政財界そして学界において盛んに躍った。そのピークが1989年のアジア太平洋経済協力(Asia Pacific Economic Cooperation: APEC)の創設であった。

ややあって、「アジア太平洋」に追走するように20世紀末から「東アジア」概念が台頭してきた。「アジア太平洋」概念も消えてしまったわけではないが、太平洋というと北米(アメリカ、カナダ)、オセアニア(オーストラリア、ニュージーランド)から、中南米の太平洋沿岸国(メキシコ、チリ、ペルー等)までもが含まれて地域概念としてはいかにも広すぎる。まさに1990年代に突入すると同時に当時のマレーシア首相マハティール(Mahathir Mohamad)が「東アジア経済グループ(EAEG)」構想を発表し、鄧小平(Deng Xiaoping)による「南巡講話」(1992年)以降、中国が急速な経済発展を遂げ、世界銀行が日本、アジアNIEsと一部ASEAN諸国を『東アジアの奇跡』と称賛した報告書を刊行(1993年)し、さらには今世紀に入って「東アジア共同体」構想が進展すると、こうした出来事やアイデアが、「東アジア」という地域概念を定着せしめ、「東アジア地域主義」という新たな「アジア主義」の生成・発展をもたらしているかに見える⁶。これを第三の波と位置付ける。

この第三の波——21世紀の新しいアジア主義——が語られる際に必ず指摘・言及されるのは、一つは欧州統合すなわちヨーロッパ地域主義との比較・関連であり、もう一つは上記、第一波のアジア主義とのそれである。前者については詳しく触れないとして、後者、すなわち戦前戦中の

⁵ [小林 2014]、[小林 2015]、[小林 2017]。

⁶ 「東アジア地域主義」については筆者も過去に論じている。[高埜 2009]、[高埜 2012]を参照。関連する近年の論稿として、[Mahbubani 2008]、[Ba 2009]、[山本・羽場・押村(編著) 2012]、[Buzan and Zhang (eds) 2013]、[Goh 2013]などを参照。

アジア主義（大アジア主義）といえば、必ず想起されるのは、その名の下にアジア全域からオセアニアに至る広大な地理的範囲をその版図に収めようとして大崩壊に至った、日本の大東亜共栄圏の建設の企てと政策的プロパガンダ、そして軍政支配である⁷。勿論、現在の国際環境下においては、いかなる国であれ、そのような地域的野望を持つことは到底受け容れられるものではない。21世紀の新しいアジア主義は、戦前戦中のアジア主義の暴走に対する深い反省の上に立って構想され共有されていかねばならない。だからこそ、第一のアジア主義を研究する意義がある。だが、戦後日本による平和的なアジア回帰、すなわち経済的進出（上述の「第二波」）でさえも、多くのアジア諸国において「軍事力なき日本のアジア支配」、「軍事力でなし得なかったことを経済力で」などと揶揄され、嫌悪され、拒絶された⁸。それは1970年代から80年代にかけて、アジア各地で一連の激しい反日的行動を招いた⁹。

結局、いかなる方法・形態であれ、またいかなる動機に基づくものであれ、日本が近隣アジア諸国と接する際には摩擦が生じる。程度の差はあれ、21世紀の現在もその状況は続いている（特に歴史認識問題をめぐるとの摩擦は常に浮上する）。それは、明治維新の達成以来、非西欧世界の中でいち早く工業化・近代化に成功し、富国強兵の道を歩んだ明治から昭和初期にかけての日本が、欧米列強による植民地支配もしくは半植民地化の屈辱と辛苦に喘ぐ近隣アジア諸民族の現実を眼前にしたときから背負った宿命であった。日本にとって、維新および自らの近代化とアジア諸民族の命運は表裏一体の関係にあった。すなわち、植民地化・半植民地化された近隣アジア地域を放置しておくことは西欧列強の勢力を野放しにあるいは増長させることにつながり、それは「帝国」を標榜する自らの国際的地位のみならず生存そのものを脅かされることになりかねない。しかるに日本としては、欧米列強に伍して自らアジアを支配する側に回る（と同時に列強をアジアから追い出す）のか、あるいはアジア諸国の独立を助けて共に戦い、これらと連帯して列強を追い出すのか、という二者択一を迫られたのである。まさに孫文が看破した如く、日本は近代化の過程において「西洋の覇道の番犬となるのか、東洋の王道の干城となるのか」¹⁰の選択を突き付けられていたといえよう。

以上のような歴史的認識に基づき、本稿では3点について考察したい。第一は、近現代における日本のアジア主義を概観・整理することである。第二は、熊本・荒尾が生んだ「偉大なる大陸浪人」宮崎滔天（1871-1922）と中華民国初代臨時大総統となる孫文（孫逸仙 Sun Yat-sen、孫中山、1866-1925）との親交を通じて、そこから現代のアジアをめぐる国際関係、あるいは日本の対外関係の指針にとって有益な——もしくは有害な——要素を抽出することである。二人が夢を託した

⁷ いわゆる大東亜共栄圏の亡霊は、戦後のアジア地域主義を語る際に常につきまとう。[井上 2006]、[Saalar and Koschmann (eds.) 2007]、[劉 2013]などを参照。

⁸ 典型的には、フィリピンの歴史学者コンスタンティーノ（Renato Constantino, 1919-1999）が1979年に発表した「第二の侵略——フィリピンにおける日本（*The Second Invasion: Japan in the Philippines*）」で述べたような、（日米の提携による）「経済的（軍事的）帝国主義」という批判である。

⁹ 東南アジア諸国の反日運動については、岡部達味『東南アジアと日本の進路——「反日」の構造と中国の役割』（日経新書 242、1976年）が詳しいが、同書は今となっては入手困難のようだ。

¹⁰ これは1924年11月28日の神戸における孫文の講演「大アジア主義」の一節とされているが、嵯峨隆の研究によれば、後で書き加えられた部分であるとされる。[嵯峨 2006: 49-50] 参照。

「アジア主義」とは何であったのかを明らかにすることを試みたい。そして最後に、21世紀の現在においてアジア主義という考え方は有効なのか否か、有効であるとすれば、それはどのようにあるべきかを検証してみたい。

1. アジア主義とは何か

アジア主義とは、いったいどのように定義しうるだろうか。昭和期におけるアジア主義研究の第一人者といえる竹内好（1910-1977）は、「日本のアジア主義」¹¹において、『アジア歴史事典』（平凡社、1959-62年刊）中の野原四郎（中国近現代史、イスラーム研究者、1903-1981）が執筆した「大アジア主義」の項目を引用し、「比較的私の考えに近い」と述べている。それは大要「欧米列強のアジア侵略に抵抗するために、アジア諸民族は日本を盟主として団結せよ、という主張」であるが、時代と共に変質し、「大アジア主義」として「明治政府の大陸侵略政策を隠蔽する役割を果たすようになった」と記述される¹²。竹内はこの後半部分については批判的であるが、彼によれば、そもそもアジア主義は「多義的」であり、「どれほど多くの定義を集めて分類してみても、現実に機能する形での思想をとらえることはできない」ものであり、それは、「状況的に変化する」、「ある実質内容をそなえた、客観的に限定できる思想ではなくて、一つの傾向性ともいうべきもの」だという¹³。竹内はさらに、「それ自体に価値を内在させているものではないから、それだけで完全自足して自立することはできない。かならず他の思想に依拠してあらわれる」¹⁴とまで述べた。

そのように述べた竹内に対して中国人研究者の劉峰は、戸坂潤、矢沢康祐、趙景達らによる竹内批判をまとめつつ自らの意見を交え、「①アジア主義を、実現されなかった理想の思想としてその原型を追いつめていくに過ぎない、②アジア主義の思想性を否定した上で、無意識的に抽象化、曖昧化している、③自国中心的な視点から逃れられていない」という3点を指摘している¹⁵。

では、アジア主義は、竹内が述べたように、それ自体に価値は含まないのか。思想として成立はしないのか。上記の竹内の文章（日本のアジア主義）を「精読」した松本健一は2000年の段階において、「竹内好が『日本のアジア主義』を発表した40年ちかく後の現在、アジアの実体的な大変貌をうけて、『アジア』という概念それじたいにも大きな意味変化がおとずれていることを、わたしたちは改めて認識しなければならない」としつつ、『『西洋的な優れた価値』を『愛』によって東洋が『包み直す』とき、そこに『共生（symbiosis）』というアジア的価値が浮き出てくる』のではないかと述べた¹⁶。このようなアジア主義の持つ価値とは、「文明＝力」としての西洋的

¹¹ 原題は「アジア主義の展望」（竹内編『現代日本思想体系』第9巻「アジア主義」筑摩書房、1963年刊）。[竹内 1993:287-354] および [松本 2000] を参照。以下、同論文に言及する際には、[竹内 1993] に依拠する。

¹² 野原による執筆内容の引用は、[竹内 1993:289-291]。

¹³ [竹内 1993:292-293]。

¹⁴ [竹内 1993:293-294]。

¹⁵ [劉峰 2013:3-6]。

¹⁶ [松本 2000:186-190]。

価値を「美」という東洋的価値によって凌駕しようとした岡倉天心¹⁷（1863-1913）の理想主義的なアジア主義に通じるものがあるといえよう。

もう一人、現代においてなお——否、21世紀の現在だからこそ——日本が「アメリカへの従属」から脱却するためにも「本格的にアジアが連帯すべき」であるといい、そのための知的武装としての「アジア主義」を唱える中島岳志の議論を紹介しておこう。中島は、竹内好がアジア主義を暗示的に「政略」、「抵抗」、そして「思想」としてのそれと三つに分類しておきながら、三番目の「思想としてのアジア主義」の価値を掘り下げることができなかつたと批判する¹⁸。中島は、岡倉天心に始まり、西田幾多郎、鈴木大拙らに引き継がれてきた「多一論（多元的一元論）」によって「(西洋的)リベラリズムを包み直し、アジアによる価値の巻き返しによって普遍性を構築していかなければならぬ」と説く¹⁹。しかし、やはりそこでキーワードとしているのは、松本も用いた「共生」である。また、中島は、主権国家を前提としたアジア諸国の連帯・協調の重要性を説きながら、アジアが全体として（欧州のように）国民国家を超越（政治的に統合）することを目指さない「宙ぶらりんの安定」を目指せ、といている²⁰。

いささか議論が先走りすぎた。アジア主義の21世紀的意義を問うことは本稿の第三の課題である。このことはもっと後の方で触れるとして、まずは明治から戦時中にかけてのアジア主義を分析・整理の対象としよう。竹内に拠れば、どうも明確に定義できるものではないということになるが、批判を覚悟で大掴みにいうならば、それは尊皇攘夷思想を基盤とした日本ナショナリズムの発露であった、と行ってよいのではないか²¹。それが形成された背景は、言うまでもなく「欧米列強＝白人（コーカソイド）＝キリスト教勢力」によって植民地ないし半植民地化されていた「アジア＝非西欧世界」の現実であり、したがって、その目的は、支配・抑圧からの解放であった。支配され抑圧されたアジアと（その危機が迫っていた）日本が互いに協力・連帯することによって欧米白人勢力に対抗し、その支配を打破すべきだとする心情であり、主義主張であり運動であったといえよう。

本稿では明治から戦時中までのアジア主義の流れを以下、便宜上、「自由民権運動とアジア主義」、「国権主義・対外進出とアジア主義」、さらには「コスモポリタン型アジア主義」などと敢えて分類・整理しているが、そもそもアジア主義とは上記のように「日本ナショナリズムの発露」（の一形態）であると言い切ってしまうならば、劉峰が竹内を批判したように「自国（日本）中心的な視点」から免れないのは当然であるし、また、先に引用した野原の記述にあった如く、アジア主義は「時代とともに変質して」、「政府の大陸侵略政策を隠蔽する役割を果たすようになった」わけではないことも明白である。また、サーラーも指摘するように、アジア主義は日本政府の公式の外交政策にはなかなか浸透しなかった。日本の外交政策の一つの現実的なオプションと

¹⁷ 木下長宏は、岡倉天心の呼び名について厳密な検証を行い、生前の岡倉覚三を天心と呼ぶことは必ずしも適切ではないとして、彼自身の著作では一貫して「岡倉」と呼んでいるが、本稿においては慣例に従って「天心」と表記することとする。[木下 2005]を参照。

¹⁸ [中島 2014:30-31]

¹⁹ [中島 2014: 446-447]

²⁰ [中島 2014:448-450]。但し、同じく「共生」という言葉は使っているものの、中島は松本には一切言及していない。また、「欧州のように」は筆者が補足した。

²¹ 同様の評価を [上村 2001:28] は批判的な観点から述べている。

しての地位を得るのは、日露戦争（1904-05）を経て、1914年の第一次世界大戦の勃発後に——日本が列強ないし「一等国」の仲間入りを果たしたと自他ともに認めるように——なって漸くだった、と彼は分析する。その契機となったのは、若き衆議院議員であった小寺謙吉（1877-1949、戦後は神戸市長を務めた）による、1916年の「大アジア主義論」の発表であったとする²²。

「日本のアジア主義」は、その原初段階から在野の思想家・運動家によって担われ、欧米列強に侵略され支配されたアジアの惨状を見かねた、すなわち義憤に駆られた彼らが、これを解放して日本と連帯を成さんとする半ば義務感ないし義侠心のような心情的要素に濃く彩られていた。と同時に、国家の近代化に伴う富国強兵の論理——その故に結果的に自らアジアを侵略するという落とし穴に嵌った——の両方が含まれていたとみるべきであろう。「尊皇攘夷思想に基づく日本ナショナリズム」とは、日本こそがアジアの盟主であり、皇国たる、すなわち世界的に見ても唯一無二の至高性と威光をもつ天皇（制）をいただく日本がアジアを教導する（すべきだ）、という考え方に他ならない。したがって、天皇の下で人民は全て平等である（民権思想）²³が、しかし、その天皇をいただく日本国家が欧米列強の後塵を拝してはならない（国権思想）のである。両者は分ちがたく結びついてきたとみる方が自然であろう²⁴。その意味では、状況的に変化するのがアジア主義だと竹内が述べたのは正しいといわざるを得ない。

これを思想的に説明するならば、坪内隆彦がいうように、そのルーツは山鹿素行の『中朝事実』に代表される古学（国体思想）に、さらには江戸時代の国学、とりわけ本居宣長や平田篤胤の著作に、さらに遡れば、結局のところ『日本書紀』であり『古事記』であり『万葉集』に行き着くことになる²⁵。加えて、勤王の志士たちのバイブルとされた浅見綱斎の『靖献遺言』や、西郷南洲が幕末から明治維新後にも愛読していたという陽明学者・大塩平八郎の『洗心洞劄記』などに、尊皇攘夷思想に基づくアジア主義のエッセンスが凝縮されているといえる。その南洲が一般に「征韓論」と呼ばれる朝鮮との関係修復を、自ら命を賭してでも敢行すると訴えたのは、西欧列強の脅威がアジアに差し迫る中のことであった。

いわゆる征韓論は、その後のあらゆる日本のアジア主義の源流となる²⁶。そして西郷の影響と遺志は、大きく二つの潮流に分かれて引き継がれていった。一つは自由民権運動のとの関係で、板垣退助を筆頭とする、いわゆる民権派が担った部分である。他方では、いわゆる国権派と見做された頭山満や荒尾精、さらには内田良平などのアジア主義へと脈々と受け継がれていった。今日、頭山や内田が、さらに後年の大川周明なども「アジア主義者イコール右翼・国粹主義者」という括られ方をする所以である。しかし、ことはそう単純ではない。そのことを以下の2節において述べていきたい。

2. 自由民権運動とアジア主義

²² [Saaler and Koschmann (eds.) 2007: 6-7].

²³ 頭山満の孫である頭山統一（1935-1990）は、このことを、「(天皇によって) 権利を保障された人民（臣民）は、天皇に捧げる忠誠心において万民貴賤のへだてなく平等である」と表現している。[頭山 1977:73].

²⁴ 中島も異なる表現ながら同じようなことをいっている。詳しくは、[中島 2014:67-84].

²⁵ [坪内 2011: 12-22].

²⁶ [竹内 1993:339, 352-354]、[坪内 2011:49-52].

征韓論の内実については、現在では毛利敏彦（1932-2016）の研究²⁷などもあり、必ずしも「征韓」の字面から受ける印象どおりではないことも知られている。西郷は、武力侵攻を前提とせず、死を覚悟で自ら大韓帝国に赴き李王朝を説得して開国させ、欧米列強に対抗するために日朝提携を図るという使命感を有していたというのである。よって坪内隆彦などは、これを「遺韓論」と表現している²⁸。しかし、西郷の日韓提携についてはアジア連帯構想は、結局のところ「文明開化派」の岩倉具視や大久保利通との権力闘争の中で葬り去られ、西郷は下野するに至る。西郷に同調して参議の職を辞したのが板垣退助、副島種臣、後藤象二郎、江藤新平らであった（明治六年政変=1873年）。

征韓論と民権論

西郷を追って下野した一人に板垣退助がいたことに注目したい。板垣といえば自由民権運動である。彼は、この時やはり西郷に同調して下野した江藤新平、後藤象二郎、副島種臣らと共に国民議会の開設に尽力する（1874=明治7年1月、「民撰議院設立建白書」提出）。要するに、民権運動家のほとんどが西郷支持派だったのであり、西郷の唱えた「征韓論」を支持していた²⁹。そして、西郷支持者の多くが1877（明治10）年、西郷の挙兵に呼応して西南の役に身を投じたが、その中に「九州のルソー」と呼ばれた肥後の民権運動家、宮崎八郎（1851-1877）もいたのである。後の白浪庵滔天こと宮崎寅蔵（虎蔵）の19歳年上の兄であり、徳富蘇峰（1863-1957）をして「才気煥発の士」、「天成のジャーナリスト」と評せしめた³⁰前途有為の青年であった。滔天が後年、孫文の考えに共鳴してほぼその半生を中国革命運動の支援に捧げた思想的背景の一つに、兄・八郎を通じて学んだルソーおよび中江兆民（1847-1901）の自由民権思想があった（後述）。

ルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778）の『社会契約論』を、後に東洋のルソーと呼ばれる中江兆民がフランス留学から持ち帰ったのが1874（明治7）年のことである。兆民は同年すでにこれを『民約論』³¹と題して翻訳し始め、その訳本は（出版される以前に）回覧・筆写されて流布していた。宮崎八郎は、一時期、明治の民権主義青年の間で愛誦されたという「泣読盧^{ルソー}民約論」

（泣いて読むルソーの民約論）という漢詩を西南戦争に出征する前に書いているが、飛鳥井雅道は、八郎が読んだ『民約論』は、この明治7年の兆民訳のものだったとほぼ断定している³²。

ところで、中江兆民は一般的には「アジア主義者」と見られてはいないが、竹内好は「日本のアジア主義」の中で、兆民を1880年代の状況における「狂言回し」と位置付けている³³。それは

²⁷ これについては、[坪内 2011:41-44]、[中島 2014:55-60]を参照。また、坪内は、毛利の研究だけでなく勝海舟の談話をも引いて「西郷=征韓論者」を否定している。

²⁸ [坪内 2011: 41-44]。

²⁹ [葦津 2007: 20-21]。ここでは便宜上「征韓論」という言葉を使うが、その内実が異なることは既に指摘したとおりである。

³⁰ [近藤 1984:10-11]。

³¹ 『民約論』という題名は既に1872（明治4）年に兆民の師・箕作麟祥が付けた。[飛鳥井 1999:91]。

³² [飛鳥井 1999:113, 91]を参照。

³³ [竹内 1993:328]。

いうまでもなく兆民が1887（明治20）年に発表した『三酔人経綸問答』³⁴の中で、アジア（具体的には中国）への侵略を声高に主張する人物（豪傑の客＝豪傑君）を登場させているからである。

『三酔人』は、日本の国際関係学徒なら一度はその洗礼を受ける古典だが、当時の（対清開戦が現実味を帯び始めていた）状況下において、民権論と国権論のせめぎ合い、専制から立憲、民主への社会進化論、さらに武装放棄論・非暴力無抵抗主義、はては現代の「民主主義平和論」（Democratic Peace）を先取りするような議論が次々と展開される。飛鳥井は兆民の本質に「漢字文化圏全体を含む東洋社会が基軸」³⁵にあるとして、『三酔人』は対中国侵略を婉曲的に否定するものだと解釈しているが、その点において兆民はアジア主義者だったといえるかもしれない。

板垣・頭山の出会い

さて、（字義通りの）征韓論と民権論は基本的に相容れない思想である³⁶。では、民権論者たちはなぜ西郷の征韓論を支持したのか。彼らは、外交政策は公議公論に付されるべきで、征韓論が議会政治の中で議論されれば、必ずや国民の大多数の支持を得るであろうと考えたからである。西郷亡き後、「大久保・岩倉他＝有司（官僚）専制政府」対「板垣・後藤他＝民権派」という政治的対立の構図において、1878（明治11）年5月、大久保利通が東京・紀尾井坂で暗殺される。

この報に接し、土佐にいた板垣のもとに駆けつけたのが福岡の頭山満（1855-1944）であった。血気盛んに藩閥政府打倒の挙兵を促す頭山に対し、板垣は民権論の重要性を懇々と説いたという³⁷。西郷の死後もなお彼の愛読書『洗心洞劄記』を自らも愛読したほど西郷に傾倒していた頭山³⁸は、西郷の遺志を継いで決起せんとの意思が強かったというが、その後、福岡に戻って民権思想を教育する私塾（向陽義塾）を開設する。これが礎となって筑前共愛会を名乗る結社ができ、さらにそれが発展的に1881（明治14）年、筑前玄洋社となるのである。頭山と自由民権論というと意外な組み合わせに思われるであろうが、頭山が板垣に会いに行った際、同行した奈良原到は後年、頭山と自分は「自由民権議論もよくわからぬままに「板垣の人物ばかりを信用し」た（のが後に日本を腐敗墮落させるに至った遠因となった）」と述懐している³⁹が、頭山は板垣の人柄とその至誠に惚れ込み、民権運動に身を投じていくのである。

頭山は、民権活動を通じて河野広中、杉田定一、植木枝盛などとも親交を結んだが、実は、思想信条の相違を超えて中江兆民と個人的に親しかったという。竹内好は葦津珍彦や藤本尚則の著作を引いて、その親交ぶりを紹介している⁴⁰。また竹内は、この関係は、頭山の弟子であった内田良平と兆民の弟子たる幸徳秋水において思想面で袂が分かたれ、遂に交わることがなかったと述

³⁴ 桑原武夫・島田虔次訳・校注、岩波文庫、初版1965年。

³⁵ [飛鳥井1999:170]。

³⁶ [衛藤2003b:78、80]を参照。

³⁷ [葦津2007:25-29]。

³⁸ 頭山満は、西郷の旧宅を訪れた際、南洲が愛読し書き込みまでしていたという『洗心洞劄記』の現物を、留守を預かっていた川口雪蓬が止めるのも振り切り、遺愛の机の中から引っ掴んできた（但し、読後には送り返した）というエピソードがある。[夢野2015:33-34]。

³⁹ 「夢野2015:98-100」。()内は筆者補足。

⁴⁰ [竹内1993:340-342]。たとえば、頭山と兆民が玄洋社員や樽井藤吉、熊本の前田下学らと共に1884（明治17）年、釜山に日中韓3か国語を学ぶ語学校「善隣館」を設立しようと計画していたことなどもその一例である。[頭山1977:100]を参照。

べている⁴¹。ここでロシアを自ら（文字通り徒歩で）踏査してソ連国内の事情をつぶさに観察した後、対ソ主戦論を唱えた内田良平を登場させるのはまだ早いだらう。本稿次節で引き続き頭山を中心とする玄洋社の動きと日清戦争に至る経過をみていくが、その前に民権思想・運動（ないし平等主義）とのかかわりでアジア主義者であった二人の人物について触れておきたい。大井憲太郎（1843-1922）⁴²と樽井藤吉（1850-1922）⁴³である。

大井憲太郎と樽井藤吉

大井憲太郎は中江兆民と同じく箕作麟祥（1846-1897）の門下生で、板垣退助が創設した愛国社に参加し、弁護士としても活躍した。後に兆民らと共に自由民権を訴える政治家として1890（明治23）年の立憲自由党の結党に参加、そして同党を脱党した後1892（明治25）年に東洋自由党を創設した。しかし、何とんでも大井は1885（明治18）年11月に130名もの逮捕者を出した「大阪事件」で有名である。大阪事件とは、大井を中心とする自由党左派活動家（「志士」）たちが、クーデタ（甲申政変）に失敗した朝鮮開化派（韓国独立党）による政変を支援するために武器弾薬を調達し、資金集めのために各地で強盗を働いたという事案である。しかし、実行前に計画が官憲の知るところとなり⁴⁴、あえなく逮捕・投獄に至ったのである。

一方の樽井藤吉は、「勤皇志士の行動を支えた道義国家日本の理想の体現を目指して」⁴⁵、1882（明治15）年に「東洋社会党」という日本で初めて「社会党」の名を冠する政党を結成した人物である。しかし、治安を妨害するとして集会条例によって起訴され、1年の禁固刑を受けた。樽井は大阪事件にも連座した嫌疑で投獄されている。大井も樽井も、共に韓国独立党のリーダー・金玉均（Gim Okgyun/Kim Ok-kiun）を支援していた。金玉均といえば頭山満や宮崎滔天とも親交があったが、かの福澤諭吉が慶應義塾に迎え入れて惜しまず支援した人物であった。このことについては後述したい。

そして、大井と樽井の両名共に頭山および玄洋社との関係が深かった。条約改正問題が国論を沸かせていた1889（明治22）年10月、「屈辱外交」への抗議行動として外相・大隈重信に対する爆弾テロ事件が起きた。この時の実行犯は来島恒喜という玄洋社の社員（但し実行前に退社）であり、爆弾を投げて大隈外相の片脚を吹っ飛ばした後、自らの首を短刀で掻き斬って自死するという凄まじさを見せつけた。その爆弾というのが、上記大阪事件の計画（朝鮮で使用する目的）のために大井の同志が隠し持っていたのを、頭山が大井に直談判して譲り受けたものであった。大井は同事件で懲役9年の刑を科されていたが、憲法発布の恩赦で、この同じ年の2月に釈放された。その後も彼は急進的あるいは革命的自由民権運動家として政治活動に邁進するが（1894＝明治27年の衆議院選挙に当選）、晩年は中国・東南アジアへの進出事業に意欲を見せた。

⁴¹ [竹内 1993:340]。

⁴² 大井について詳しくは、[坪内 2011:66-78]、[竹内 1993:312-316]などを参照。

⁴³ 樽井について詳しくは、[坪内 2011:79-93]、[竹内 1993:316-323]などを参照。

⁴⁴ 頭山統一は、大阪事件「の実行計画は粗放杜撰」であり、「大井一派の支離滅裂な行動」は「集団的ノイローゼ患者の突発的犯罪という印象」と手厳しく評している。[頭山 1977:99-100]。

⁴⁵ [坪内 2011:83]。竹内は樽井について、大井、兆民、福澤らと違って洋学の素養がないと指摘し、「それだけに今日かえりみてきわめて新鮮である」と評している [竹内 1993:321-322]。一方、[中島 2014:131-135]は、『大東合邦論』がスペンサー（Herbert Spencer, 1820-1903）の社会進化論に大きく影響されており、それは「これまでの研究であまり強調されて」こなかったという。

樽井藤吉も大阪事件への関与を疑われたり、東洋自由党の結成で大井と行動を共にしたり、頭山と共に玄洋社の浪人を朝鮮に送り込む計画を立てるなど、大井と同様、急進的な活動家であった。しかし、樽井は運動家としては過激な面があったが、彼が漢文で著した『大東合邦論』（1893（明治26）年）⁴⁶には、極めて理想主義的なアジア主義の議論が展開されている。その骨子は、欧米列強（白人勢力）の侵略に対抗して日本と韓国が対等の立場で合併して連邦国家となり「大東」と名乗ること、清（中国）とは合併できないが合縦すること、究極的には全アジア連邦から世界連邦の実現を大理想としていたとされる。坪内隆彦は、これが「日本のアジア侵略の理論的根拠とされたというのは、全くの曲解」⁴⁷と言い切る。しかし、中国人研究者の目から見れば、『合邦論』は相当に違った様相を呈する。劉峰は、樽井の思想における近代主義的な側面および日韓合邦後の対等性を保証する方法については評価しつつも、樽井の中韓に関する現状分析には両国に対する侮蔑感をあからさまに感じると批判し、結局は体の良い朝鮮征服の論理であるとして、樽井の「相等性」は外見的なものに過ぎず、実際の「不平等性」を厳しく指摘するのである⁴⁸。

勿論、中国人の心情からしてこうした批判が出てくるのはやむを得まい。しかし、日本の思想的な観点からは次のように言える。すなわち、樽井が最初に『合邦論』を書いたとされる同じ1885年、福澤諭吉は自ら創刊した『時事新報』の社説に「わが国は隣国の開明を待って共にアジアを興すの猶予あるべからず」と書いた（いわゆる「脱亜論」）⁴⁹。樽井も福澤も共に朝鮮開化派への支援には熱意を持っていたわけだが、この年に福澤は脱亜へと転じた一方で樽井は『合邦論』を書き、8年後もその考えをなお棄て去らなかったのである。

時代はだいぶ下がったが、大井と樽井は自由民権思想・運動の系譜につながるアジア主義者として紹介しておきたいと思った次第である。

3. 国権主義・対外進出とアジア主義

明治から第二次大戦時中にかけての日本のアジア主義は、ある時点から民権主義的な傾向を脱して国権主義、あるいは侵略主義へと変貌、もしくは「転向」したという見方が一般的なようである⁵⁰。しかし、征韓論争で西郷の主張を受け入れなかった明治政府は、わずか2年後の1875（明治8）年、江華島事件⁵¹をきっかけに朝鮮に開国を迫り、翌1876（明治9）年、開国条約である江

⁴⁶ 実際に刊行されたのは1893年であったが、実は1885（明治18）年に一度日本語で書いたものを入獄のために紛失した、とされている。

⁴⁷ [坪内 2011:88]。

⁴⁸ [劉峰 2013:19-23]。

⁴⁹ [竹内 1993:327] に言わせれば、「『大東合邦論』は彼（福澤）から見てなまぬるい」ということになる。（ ）内は筆者補足。

⁵⁰ [竹内 1993:302-308] を参照。竹内は、頭山満率いる玄洋社が、1886（明治19）年の、いわゆる長崎清国水兵事件を契機として「民権伸長論を捨てて、国権主義に変わるに至れるなり」と宣言したことを紹介している（[竹内 1993:306-308]）。一方、そのような見方は単純に過ぎると言う[頭山 1977:85] は、[同左:156-157] で、1892（明治25）年のいわゆる「選挙大干渉」において玄洋社が「民権派の敵対対象となり、完全に国権主義へ方向転換した、とする説が一般に通説となった」と述べつつ、後年、それを過ちだったとする玄洋社の姿勢にも疑問を呈している。

⁵¹ 江華島事件について詳しくは、[竹内 1993:28-30]（旗田巍『朝鮮史』からの抜書き）および[坪内

華条約を半ば強制的に結ばせたのである。このような動きはアジア主義と呼ぶに値しないが、国権主義的な近隣アジアへの進出ないし侵略は、かなり早い段階から始まっていたということである。日本の動きに便乗して欧米列強が開国を迫る中、朝鮮国内は混乱に陥り、上述の独立党によるクーデタが起こるが三日天下に終わる。その中心人物であった金玉均、朴泳孝 (Bak Yeonghyo) らが日本に亡命してくる。これを匿い支援したのが大井や樽井であり、福澤であり、頭山だった。

上述した大隈外相の「屈辱的」な条約改正案に抗議して爆弾テロにまで関与した玄洋社が、一躍世間にその名を轟かせたのは、「条約改正を論ずべき場としての国会の開設運動」においてであった。民意を反映させる場としての国会開設は民権的運動だが、条約改正は外交問題であり、極めて国家（国権）的な課題である。この思想と行動の結合からも、玄洋社が民権主義と国権主義（的志向）の双方を併せ持つ団体であったことは明白である⁵²。早くも 1880（明治 13）年 1 月、全国で民権運動が盛り上がりを見せる中、高知の立志社を中心とする民権運動主流派が国会開設一本に絞った請願を提出したのに対し、筑前共愛会（玄洋社の前身）は「国会開設及条約改正之建言」を元老院に提出したのである。共愛会からすれば、立志社が国会開設一本に絞ったのは、政府の宥和的態度に乗じた妥協策に他ならなかった⁵³。

「明治 23（1890）年の憲法制定、国会開設」が表明されたのが、1881（明治 14）年 10 月の勅諭によってであった。同年 2 月、共愛会が改組・改名されて玄洋社が誕生する。創立時の憲則は、「第一条 皇室を敬戴すべし」、「第二条 本国を愛重すべし」、「第三条 人民の権利を固守すべし」の 3 条である。玄洋社こそが当時の日本のアジア主義を体現している、というつもりは筆者にはないが、皇室（天皇）の下の民権思想、すなわち「人民権利の主張と、粹然たる国粹の精神」が「直結した一つの典型」⁵⁴という意味において、三つの要素は「本来自明にしてすでに確固たる存在として認識されている」⁵⁵かに看取できる（すなわち、尊皇、攘夷、公議公論の三位一体である）。そのような社是を持つ玄洋社が、1885（明治 18）年頃から朝鮮開化派（韓国独立党）の金玉均、朴泳孝らを支援するようになり、朝鮮ひいては中国問題にも関与していくことになるのである。自ずと、そこには民権的要素と国権的要素が縋り交ぜになって表れてくる。

金玉均と日清戦争

金玉均、朴泳孝らが朝鮮近代化の模範とした日本と関わり始めるのは 1870 年代末に遡るが、金自身が李氏朝鮮政府の青年官僚として初めて来日したのは、やや遅れること 1882（明治 15）年 2 月（ないし 3 月）のことであった。金は日本全国を回って地方議会・政庁、裁判所、学校、会社・工場、在外公館などを視察した。東京では福澤諭吉の慶應義塾に遊学し、東亜同文会の前身である興亜会（振亜会）にも出入りした。興亜会の創立者の一人に、米沢藩士の出で維新後に海軍大尉となった曾根俊虎がいた。曾根は生前の宮崎八郎と親交があったが、弟の滔天とも偶然に出会

2011:44-45] を参照。

⁵² 折本龍則は [頭山 1977] を紹介した彼のブログ記事の中で、玄洋社は「尊皇を前提した国権と民権の調和を志向してい」たと述べる。「維新と興亜 Asia Restoration」<http://asiarestoration.com/>（筆者閲覧 2017 年 9 月 8 日）

⁵³ [頭山 1977:64-65]、[葦津 2007: 30]。

⁵⁴ [葦津 2007: 32-33]。

⁵⁵ [頭山 1977: 13-14]。

う。1897（明治30）年、滔天が犬養毅の用意した外務省の機密費を使って中国に秘密結社の調査に行く前に、小林樟雄（岡山藩士出の自由民権運動家で大阪事件にも関与。後に衆議院議員）に挨拶に行った際、そこに曾根が居合わせたのだった。そして、この曾根こそが、滔天と孫文の出会いを取り持つことになるのだが、その話は本稿後半に回すこととしよう。ついでに記しておけば、大隈重信の片脚を吹っ飛ばした来島恒喜も金との親交は深く、爆弾事件を起こす間際まで朝鮮独立のために命を賭すとの約束を果たせぬことを残念に思っていたという⁵⁶。

滔天自身も金玉均と親交があったが、そのエピソードもまた後述することとしたい。というのも、滔天が金に面会して意気投合するのは、金が上海で暗殺される直前のことだからである。その前に、決して楽ではなかった金の足掛け約10年に及ぶ滞日生活について触れておきたい。

上記の如く1882年2月（ないし3月）に初来日した金は同年7月（ないし8月）まで日本に滞在した後いったん帰国したが、その後も朝鮮政府高官として何度か日本と朝鮮を往来した。その内の1回は、多数の日本人外交官らが殺害された82年7月の壬午軍乱の後始末のため、謝罪使節団の一員（書記官）としての来日だった。翌1883年に勃発した清仏戦争の戦況下での清国軍劣勢を好機と見た金は、1884（明治17）年12月、日本公使・竹添進一郎の協力を得て閔氏政権打倒のクーデタを起こす。これが甲申政変である。だが、袁世凱（Yuan Shikai）率いる清国軍の介入によって、上述の通り文字通り三日天下で政権の座を追われることになる。そして、ここでもまた多くの日本人が犠牲となった。日本の清に対する敵愾心は益々高まることとなる⁵⁷。

金、朴ら9名は竹添公使らと共に命からがら仁川から長崎行きの船で脱出、日本に亡命した。ところが、その道中、既に彼ら亡命者は、クーデタを支援したはずの竹添公使から厄介視されていたという。このことが象徴するように、日本における亡命生活は不遇を極めた。特に翌年の大阪事件への金自身らの関与が疑われて⁵⁸小笠原島へ島流しに遭う⁵⁹。病を患ったために1888（明治21）年からは北海道（札幌）へ移されたが、東京に帰ってきたのは1891（明治24）年のことであった。東京で朝鮮人青年らと祖国独立運動を開始したもの思うようには盛り上がりせず、さらに不幸なことに、一緒に亡命してきた朴との間に相互不信感を高めていた⁶⁰。

そのような状況下で金は、清国宰相・李鴻章（Li Hongzhang/Li Hung-chang）の養子・李経方（Li Jingfang）から「朝鮮の改革に父李鴻章の同意援助を取り付けうる。上海で会談したい」という内容の密書を受け取った。これが危険を孕むものであると承知の上で、東京での独立運動の停滞を打開する好機であると見た金は、「虎穴に入らずんば虎児を得ず」との心境で、まさに渡りに船とばかりに渡航を決断する⁶¹。頭山らは強く反対し、また、朴が、自身および金に対する暗殺計画が

⁵⁶ [葦津 2007:51]、[坪内 2011:211]。

⁵⁷ [頭山 1977:99]。

⁵⁸ ジャンセンによれば、実際、金は大井らから全面的な相談を受けており、金も計画の詳細の多くに実際に関与していたという。[Jansen1954: 47]。

⁵⁹ この間、金は、先に島に渡って開拓事業を起こしていた来島恒喜ら玄洋社社員と日夜、親交を深め、また島の子供に勉強を教えるなどして亡命生活を送っていた。[坪内 2011:211]、[小林 2014:210-211, 243-244] を参照のこと。

⁶⁰ [葦津 2007:54]、[頭山 1977:172-173]。

⁶¹ [葦津 2007:55]、[頭山 1977:174]などを参照。また、宮崎滔天との会談の際の様子は、[近藤 1984:30-31]、[高野 1990:77] を参照。

あると警告したにもかかわらず、金の門下生らは朴を信用せず、金は書生1名（和田延次郎）、朝鮮人官僚の洪鐘宇（Hong Jong-u）と清国公使館の通訳1名の計3名と共に、1894（明治27）年3月、神戸から日本郵船の「西京丸」で出港した。同27日、金は上海に到着して東和洋行ホテルに投宿するが、翌28日、同行した洪に、まさにそのホテルでむざむざと射殺されてしまった。実は、金は洪が自らの刺客と知りつつ同行させた。金は、日本滞在中に接近してきた洪と親交を深め（周囲は警告していたが）、一説によればすっかり洪を懐柔した気になっていた⁶²。

金の遺体は清国の軍艦「威遠号」で韓国へ届けられた後、首と胴体を八つ裂きにされ、いわゆる凌遲刑に処せられた。梟首（晒し首）の高札には「謀反大逆不道罪人玉均」などと記されていた⁶³。金が殺され、残忍な方法で晒し者にされたことは、日本国内で思わぬ余波を呼ぶこととなった。日本政府からは厄介視されていたものの、福澤、頭山らに加えて後藤象二郎や犬養毅とも親交の深かった金の日本での人気は高く、5月20日に浅草本願寺で営まれた葬儀には、玄洋社や民党（民権派各党）の政治家のみならず、多数の一般市民も参列に駆け付けたという⁶⁴。そして、金の仇を討てとばかりに国内では対清開戦論が沸騰した。甲申政変後から『時事新報』で開戦の論陣を張ってきた福澤諭吉は勿論のこと、玄洋社員や自由党系指導者らも政府・軍部に開戦を強く迫った。同年、朝鮮では甲午農民戦争（東学党の乱／東学農民運動）⁶⁵が起き、この後処理を巡って日清両国が出兵、7月25日に豊島沖海戦（Battle of Pungdo/Feng-tao）が勃発して事実上の交戦状態に入る。8月1日、日清両国は互いに宣戦布告し、こうして日清戦争が始まった。

話の本筋から外れるので、本稿ではこれ以上、日清戦争の経緯について詳しくは触れない。ここで述べておきたいことは、金玉均の果たした——限定的な、しかし重要な——役割についてである。結局、彼は思い描いていた韓国の独立を見ることなく無念の死を遂げた。しかし、頭山統一や葦津珍彦も述べるように、金との10年にわたる交友は、頭山満ら玄洋社社員の心に深く刻まれ、後年の中国大陸や朝鮮半島における玄洋社の活躍の序曲をなすものとなった⁶⁶。またジャンセンは、玄洋社、民党政治家、あるいは福澤のような在野の活動家と金との関係は、後年彼らが築くことになる孫文との関係の先例となったことを指摘している⁶⁷。

荒尾精と日清貿易研究所

次に、もう一人のアジア主義者について紹介しておきたい。頭山満と同様に西郷の遺志を継がんとし、頭山とも親交が深く、また頭山が、その人となりや絶賛してやまなかった荒尾精（1859-1896）である。若い時分に一家が離散して苦勞した荒尾は、薩摩藩出身の菅井誠美に引き取られて我が子同然に可愛がられ、西郷の精神に触れる。やがて西郷を敬愛し、興亜を目指すようになる。複数の外国語を修めるなど勉強熱心だったが、軍人を志して陸軍士官学校に入学する。この時1級上の根津一（1860-1927）と知り合うが、後に東亜同文書院の初代院長となる根津は、荒尾

⁶² [高野 1990:77]。

⁶³ [頭山 1977:175]、[葦津 2007:56]。Wikipedia でその画像を見ることができるが、閲覧注意。

⁶⁴ [頭山 1977:176]、[葦津 2007:57]。金の遺髪と衣服の一部が日本に持ち帰られ供養された。また、青山墓地には犬養、頭山ら支援で墓が建てられた。

⁶⁵ この時、東学党支援のために組織されたのが「天佑俠」であり、頭山は玄洋社から内田良平、大原義剛を派遣した。

⁶⁶ [頭山 1977:176]、[葦津 2007:57]。

⁶⁷ [Jansen1954:47, 237 n.39]。

の生涯の盟友となる。二人は、西郷が影響を受けた浅見綱齋の『靖献遺言』に強く感化され、その忠孝義烈の精神を分かち合う 20 名の同志と共に日曜祝日や夏休みに自主的な勉強会を開いて熱心に学んだという⁶⁸。

陸軍士官学校を卒業した荒尾は熊本歩兵連隊に赴任し、その間、紫溟会の佐々友房(1854-1906)⁶⁹らと親交を結んで、しばしば中国問題、アジア問題について議論を戦わせたという。大陸への雄飛を夢見て居ても立っても居られなかったという荒尾が、遂に中国へ渡るときが来た。1886(明治19)年4月、陸軍中尉として中国での現地調査を命ぜられて派遣されたのである。荒尾は上海で岸田吟香⁷⁰の楽善堂薬舗に飛んでいき、そこで多くのアジア主義者と出会う。その中には、玄洋社や紫溟会の他、上海の東洋学館などの人脈などがあつた。荒尾は漢口に楽善堂の支店を開設し、自ら店主となって薬品、書籍、雑貨などを売る傍ら、集まってきた志士たちと共に中国全土の情報収集に努めた⁷¹。それは「大陸諜報活動の先駆」となったが、全く無償で行われたのであつた⁷²。

4年の中国滞在の後、帰国した荒尾は退役し、日清貿易拡大と人材育成の必要性を主張した。日清貿易研究所——と名付けられたが、その視野は実際アジア全土に及んだ——の設立を構想し、約1年をかけて全国を回って生徒を募集し、300名の応募があつたところ150名を選抜し、1890(明治23)年9月、荒尾はその150名の生徒と共に自ら所長として再び上海の地を踏んだ。この日清貿易研究所は後の東亜同文書院の前身である。但し、松方正義蔵相をはじめ政府・軍部の肝煎りで資金集めがなされたにもかかわらず、現地では資金不足で食料調達にも苦しんだ。さらには風土病に教師も生徒も苦しむ中、荒尾の盟友根津は、かつて漢口楽善堂で収集された膨大な資料を基に大著『清国通商総覧』をまとめあげた。そして1893(明治26)年には、第1回卒業生89名を送り出すに至つた⁷³。貿易研究所という割にビジネス界に進んだ卒業生は少なかったようだが⁷⁴、同研究所が日清戦争勃発のためにやむなく閉鎖されると、卒業生の中には通訳や先導隊として従軍を志願する者が現れた。だが、そのほとんどが捕縛されて斬首あるいは銃殺された。

日清開戦後、荒尾は『対清意見』⁷⁵を著して、百年の長計をもってする日中の提携を説き、そのため特に両国の国民感情の悪化を避けるべしと述べて、日本国内に高まっていた清に対する巨額の賠償請求や領土割譲を求める声を戒めた。あくまで追求すべきは興亜であつた。荒尾は、その

⁶⁸ [坪内 2011:177-179]。

⁶⁹ 頭山満とも親交が深かつた佐々友房は、熊本の政治結社「紫溟会」の代表であるが、これと対立する「相愛会」と玄洋社との複雑な関係については、本稿とは直接関係ないので割愛するが、玄洋社のその後の活動を見る上では興味深い。[頭山 1977:113-130]を参照されたい。

⁷⁰ 岸田吟香については、衛藤瀋吉による「中国革命と日本人——岸田吟香の場合」が参考になる。[衛藤 2003b: 23-66]。

⁷¹ 1888(明治21年)頃、杉山茂丸も漢口に荒尾を訪ねて中国・アジア問題に関する薫陶を受けている。杉山は若い頃に頭山の片腕として活躍し、後年は「政界の黒幕」と言われた。作家夢野久作の実父である。[坪内 2011:266]。

⁷² [頭山 1977:177-178]。

⁷³ [坪内 2011:182-187]、[頭山 1977:177-182]。『清国通商総覧』(1892(明治25)年刊)は、「シナに関心を持つ学者といわず商人といわずすべての識者にその価値を認められた」と頭山は述べている。

⁷⁴ [Jansen1954:50]。

⁷⁵ 1894年10月刊。国立国会図書館デジタルコレクションで現物を見ることができる。

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/785593> (筆者閲覧 2017年9月14日)

結語に「三大要件」として以下のように述べた。

- 第一 朝鮮の独立を安全にし東洋の平和を鞏固にするが為め。清国をして盟約せしめたる条約履行の擔保として我国は渤海に於ける最要の某軍港を預り置くべし。
- 第二 東洋の平和を維持する為めに。我国は講和の成ると同時に。清国政府と協議の上。適當の方法に由り。清国の鄙都人民一般に我宣戦の主旨を説明し。之をして遍く我国の真意を領會せしむべし。
- 第三 日清両国の福利を増進し東洋の平和と興隆とを期する為めに。従来通商上我国が受けたる不便不利を一掃し。欧米各国に比して更に優等親切なる通商条約を訂結すべし⁷⁶。

その内容が中国に寛大すぎるとして反論批判が相次いだ。これに対して荒尾は 1895（明治 28）年 3 月、『対清弁妄』を著し、その中で皇国日本の至高性を強調し、「海外列国、概ね虎呑狼食を以て唯一の計策と為し、射利貪欲を以て最大の目的と為し、其奔競争奪の状況は、恰も群犬の腐肉を争うが如」くであって、「天成自然の皇道を以て虎呑狼食の蛮風を攘ひ、仁義忠孝の倫理を以て射利貪欲の邪念を正」すのが「我皇国の天職」なのだから、列強に伍してアジアにおける覇権争いに日本が加わるべきではないと主張した⁷⁷。翌 1896（明治 29）年 9 月、荒尾は日本の台湾統治における相互の利害調整を図るための組織「紳商協会」設立のために台湾を訪れるが、そこでペストに感染してしまう。10 月 30 日、同行した門弟らの必死の看病もむなしく息を引き取った。まだ 39 歳という若さだった⁷⁸。

生前から荒尾を高く評価していた頭山満は、その死に接し、「…諺に五百年に一度は天偉人を斯世に下すとあるが彼は其人ではあるまいかと信ずる位に敬慕して居った。彼の事業は其至誠より発し、天下の安危を以て独り自ら任じ、日夜孜々として其心身を勞し、多大の辛苦艱難を嘗め、益々其精神を励まし、其信ずる道を楽しみ、毫も一身一家の私事を顧みず、全力を傾倒して東方大局の為に尽せし其奉公献身の精神に至っては、実に敬服の外なく、感謝に堪へざる所であって、世の功名利慾を主とし、区々たる小得喪に齷齪する輩と全く其選を異にし、誠に偉人の器を具へ、大西郷以後の人傑たるを失はなかった…（以下略）」⁷⁹と最大級の賛辞を送り、「此人ならば必ず東亜の大計を定め、頗る後世を益するの鴻業を成し遂げるであらうと信じて居った」⁸⁰と、その若すぎる死を悼んだのであった。

さて、以上のように述べてはきたものの、筆者は頭山満や荒尾精を「国権主義的・対外進出的アジア主義者」とカテゴライズしたいわけではない。1890 年代という時代——日本を取り巻く国

⁷⁶ 同上「デジタルコレクション:55-56」漢字カタカナ交じり文を筆者が一部現代漢字とひらがなで書き換えた。

⁷⁷ 『対清弁妄』を引用した [坪内 2011:188]。

⁷⁸ [坪内 2011:189-190]、[頭山 1977:182]。

⁷⁹ [頭山 1977:182-183]。

⁸⁰ 同上。

際情勢、なかんずく近隣アジア諸国の情勢が緊迫していくと同時に日本の国力も増大する中で、衰えたりとはいえアジア随一の大国清を討てとの世論が高まるに至った時代——の状況をよく理解すべきだと言いたいのである。そうした中で、金玉均の韓国独立運動を支援した頭山満ら、また、厳しい環境の下で、まさに地に足の着いた中国の情報収集活動を長年にわたって実践し、その後の対中関係、日本の対中政策に役立てた荒尾精（や根津一）の足跡を記した次第である。

19世紀末から20世紀初頭にかけて日本は国力を益々増大させ、清（中国）やロシアという近隣大国と戦って勝利し、欧州列強（独）相手に第一次世界大戦に参戦するに至り、いよいよ「一等国」の仲間入りを果たす。そして、その後の四半世紀、中国大陸への進出を本格化させていく。この時代の流れの中でアジア主義者について論ずるならば、黒龍会を主催した内田良平や、その後の日本のアジア進出の思想面でのアーキテクトとなった大川周明、あるいは北一輝などについても触れておくべきであろうが、本稿においては、主題はあくまで宮崎滔天と孫文であるので、彼らとの関係の中で内田や大川についても述べるに留めておきたい⁸¹。

興味深いことに、頭山とは親交の深かった宮崎滔天は、1894（明治27）年の春、暗殺される直前の金玉均に会った際に自らの中国潜入計画を相談し、その費用を工面してほしいと金に頼むのだが、この時、「こんなことは他に相談できる人はいない、ただ一人荒尾精がいるが、この人の心理には必ずや支那占領主義が潜んでいるに相違ない」⁸²から相談しないと述べている⁸³。荒尾に対する警戒感は滔天一流の嗅覚だったのかもしれないが、同じように私欲を捨てて興亜あるいは日中連携を志した2人が手を携えなかったのは、歴史の偶然というにはあまりに不幸なことであった。歴史に「もしも」は禁物だが、1891（明治24）年に初めて上海の地を踏んだ滔天が、荒尾と共に樂膳堂を根拠地に大陸の情報収集にあたっていたら、彼のアジア主義者としての経験も質も大きく異なっていたであろう。また、次節以降に述べるように、滔天のアジア主義には理想主義的な色彩があまりに濃いのが、荒尾精にも勿論そのような側面がなかったどころか、彼の百年の長計にせよ、あるいは樽井藤吉の大東合邦論にしてもそうだが（竹内好曰く「空前にして絶後の創見」⁸⁴）、アジア主義者の構想には多かれ少なかれユートピアニズム的な要素が付きまとうものである。

4. コスモポリタン型アジア主義

では、これまでに紹介してきたアジア主義者たちの構想と、次に紹介するタイプとは何が異なるか。そもそも本稿におけるアジア主義の類型は、全く筆者の便宜的な分類法によっている。要するに、国際政治学／国際関係論における理論的・思想的な基本類型であるリベラリズムに民権

⁸¹ 特に大川周明について、筆者は機会があれば稿を改めて論じてみたいと考えている。

⁸² 「金玉均先生を懐う」〔書肆心水（編）2008: 46〕。

⁸³ 『三十三年の夢』の中（〔宮崎 1993: 85〕）に荒尾精を評して「支那占領主義者の一団」と述べた部分がある。〔衛藤 2003b: 77〕もそれを指摘している。1891（明治24）年、中国に初渡航した滔天は荒尾の日清貿易研究所に世話になることは拒んだのである。なお、本稿においては『三十三年の夢』からの引用は〔宮崎 1993〕を主とし、必要に応じて〔宮崎 1967〕にも言及する。

⁸⁴ 〔竹内 1993:323〕。

運動との関係を、リアリズムに国権主義との関係に準え、この第三の類型のアジア主義を、いわばカント的普遍主義あるいはインターナショナリズムに相当する部分と位置付けるのである。筆者はこれをコスモポリタン型と名付け、より普遍的な人間愛に基づく思想であり運動であると定義する。その典型的な論者として真っ先に天心岡倉覚三（1863-1913）⁸⁵を挙げるべきであるが、滔天宮崎寅蔵（1871-1922）もまたこのタイプの代表として取り上げるものである。

尤も、頭山統一が荒尾精のアジア主義を評して、「民族自決を基本とするナショナリズムの意識と平行する東洋的インターナショナルの思想というべきもの」⁸⁶と言っているが、これには筆者も全く同意する。要するに、筆者自身も上記の3分類に大して差異があるとは思っていない。違いがあるとすれば、これまでに述べてきたアジア主義の根幹をなす基本原理は、日中（日韓）は一衣帯水、同文同種といった人種的文化的共通性、地理的近接性、あるいはそれを基本とする紐帯であるといえる⁸⁷。それに対し、岡倉天心や宮崎滔天は、人種原理や欧米対非欧米という対立概念を超えたところに位置する普遍性に基礎に置いているという点で、大きく異なっていたと考えるのである。

「アジアは一つ」の意味

改めて述べるまでもなく、岡倉天心は、1903（明治36）年に（当初は英文で）出版した『東洋の理想』（The Ideals of the East, with special reference to the Art of Japan）⁸⁸の冒頭部分、「アジアは一つである」（Asia is One）という有名な文句によって、紛れもなくアジア主義者であると見做されている⁸⁹。但し、竹内好によれば、「天心は、アジア主義者として孤立しているばかりでなく、思想家としても孤立して」⁹⁰おり、「あつかいにくい」だけでなく「ある意味で危険な思想家」⁹¹だという。その理由は、「元来、国粋とアジア主義の要素が内在している」天心の思想が、「ロマン主義者としての本領からして当然に」、「最大限に放射能をばらまいた」ことによって、『大東亜共栄圏』の先覚者に仕立てられた」からであるという⁹²。要するに、「アジアは一つ」という命題は、「（樽井藤吉の）『大東合邦論』におとらず悪用された」わけで、実際には天心は、「汚辱にみちたアジアが本性に立ちもどる姿をロマンチックに『理想』として述べたわけだから、これを帝国主義の賛美と解するのは、まったく原意を逆立ちさせている」ことになるわけである。「帝国主義は、天心によれば、西欧的なものであって、美の破壊者として、排斥すべきもの」だからである⁹³。

⁸⁵ 近年になって（2013年）天心を題材にした映画（『天心』）が公開されたことは興味深い。詳しくは公式サイト <http://eiga-tenshin.com/> を参照（筆者閲覧 2017年9月29日）。

⁸⁶ [頭山 1977:184]。

⁸⁷ [Jansen1954:51-53]は興亜会やその後継たる東亜同文会の組織原理をそのように説明する。

⁸⁸ 以下、天心の英文著作の日本語訳は、[色川（編）1984]に収められた夏野広、森才子の訳文によるが、全て [色川（編）1984]として言及する。

⁸⁹ この点に異議を唱えるのが [木下 2005:286-291] である。

⁹⁰ [竹内 1993:329]。

⁹¹ [竹内 1993:396]。「岡倉天心」と題したこの文章の初出は、『朝日ジャーナル』「日本の思想家 この百年」第12回（1962年5月27日号）に所収。[竹内 1993:482]を参照。また、「内面では、この二つの相矛盾するテーゼが、こもごも生きていた」覚三（天心）の思想と言説は「扱いきくい」と述べている [木下 2005:55] も参照のこと。

⁹² 引用部分は全て [竹内 1993:396-397]（同上）。

⁹³ 引用部分は全て [竹内 1993:330]。（ ）内は筆者が補足。

中島岳志によれば、「アジアは一つ」とは正確には「アジアは多にして一つ」⁹⁴である。それは本稿第1節でも言及した「多元的一元論（多一論）」的な思想の表明に他ならない。天心がこれを書いたのは、1902（明治35）年、インドのヒンドゥー聖者ヴィヴェカーナンダ（Swami Vivekananda, 1863-1902）を訪ねて共に2週間にわたって北インドを旅行しつつ親交を深めた際、ヴィヴェカーナンダの持論たる「不二一元論」あるいは「多様性の中の単一」論に強く共感を覚えてのことだった⁹⁵。坪内隆彦が、『東洋の理想』を二人の合作と表現する所以である⁹⁶。

『東洋の理想』において「今日、西欧思想の巨塊が我々を困惑させている」⁹⁷と危機感を募らせ、同時期（1902年頃とされる）にやはり英文で書かれた通称『東洋の目覚め（覚醒）』（The Awakening of the East＝原著は無題、当時未発表）においては「ヨーロッパの栄光はアジアの屈辱」⁹⁸の上に成り立っていると看破した天心は、西洋近代にアジア全体を対置する文明論⁹⁹を展開し、アジア文明の優位を説いた¹⁰⁰のである。だが、天心の生涯を見ていくと、彼が単なる偏狭な西洋人嫌いのアジア主義者でないことは極めて明らかである。彼はむしろ文明開化に踊らされて「西洋かぶれ」になった日本と日本人を嫌悪し、これと敵対したのであり、合理主義一辺倒、科学技術（軍事も含む）万能の西洋文明、さらにはそうした精神を象徴するような西洋芸術には価値を認めなかったのである。また、彼は国粹主義者というわけでもない。1889（明治22）年に内閣官報局長の高橋健三と組んで発刊した月刊誌『国華』の誌名に、また彼が創刊の辞として書いた「抑々（そもそも）本朝古来文芸ノ秀逸優雅ナル」日本（民族）の「美術ハ国ノ精華」¹⁰¹という文章にもよく表れているように、いわば「国華」主義者であったといえる。

そもそも天心は幼少期から英語に慣れ親しみ、いわゆるネイティブ並みの英語力を持つ日本人であった。明治時代の多くの知識人と異なり、和学や漢籍の素養を身に着けたのはその後だった。彼は息子の一雄（1881-1943）らに常々、「英語がなめらかにしゃべれる自信がついたならば、海外の旅行に日本服を用いたほうがいいことを教えておく。しかし、^{フロックン}破調の語学で和服を着て歩くことは、はなはだ賛成しがたい」¹⁰²と語っていたという。いったいその真意はどこにあったのか。西洋人に対して少しも引け目を感じることなく接することができるだけの言語コミュニケーション能力があれば、（当時の多くの日本人がそうした如く）西洋人に媚びる必要は全くないのであるから、外見からして（日本）民族の誇りを堂々と示せばよい、ということになるだろうか。

付け加えるならば、若きエリート岡倉覚三の将来の方向を決定づけたのは、1878（明治11）年

⁹⁴ [中島 2014:214]。一方、[木下 2005:251] は、「反語として決して一つになり切れない実感を語っていると読むべきかもしれない」などといっている。

⁹⁵ [中島 2014:209-214]。

⁹⁶ [坪内 2011:220-224]。

⁹⁷ [色川（編）1984:196]。

⁹⁸ [色川（編）1984:70]。

⁹⁹ [坪内 2011:224-225]。

¹⁰⁰ 「竹内 1993:407」。

¹⁰¹ 引用部分は、[木下 2005:94-96] より。

¹⁰² [色川（編）1984:20]。

に東京大学に赴任してきた教授フェノロサ (Ernest Francisco Fenolosa, 1853-1908) との出会いであった。フェノロサだけでなく、天心は、ビゲロー (William Sturgis Bigelow, 1850-1926) やガードナー夫人 (Isabella Stewart Gardner, 1840-1924)、オペラ歌手のクララ・ケログ (Clara Louise Kellogg, 1842-1916)、あるいは前出ヴィヴェカーナンダの信者であったアメリカ人マクラウド (Josephine MacLeod, 1858-1949) や、同じくヴィヴェカーナンダの高弟で『東洋の理想』への序文を書き、同書や『東洋の目覚め』を添削したと見られるアイルランド出身のニヴェディタ (Sister Nivedita) ことマーガレット・ノーブル (Margaret Elizabeth Noble)¹⁰³他、多数の西洋人と深い親交を持った。しかも晩年の彼は、ボストン美術館の東洋美術部顧問 (美術館エキスパート) として美術品の整理・補修・解説の仕事をし、日米間を往復する生活を送った。往復した回数は1904 (明治37) 年から約10年間の間に5回に及び、最後の渡米は1912 (大正元) 年11月から翌年3月までであった。翌1913 (大正2) 年9月2日、新潟の赤倉で天心は息を引き取った。若くして世界を見聞してきた彼は、「その外貌、風格、内容からいって、徹頭徹尾アジア人として存在した」が、「まさに国際的な近代教養人」¹⁰⁴であったのだ。

第二次世界大戦＝太平洋戦争は、それが本来的な目的であったわけでは全くなかったにもかかわらず、いつしか植民地アジアを列強支配から解放するための民族解放、すなわち人種間の、あるいは文明間の闘争という色彩を被せられていった¹⁰⁵。そこへ天心の「アジアは一つ」——彼自身は『東洋の理想』の冒頭に記して以来、日本語でも英語でも、そのフレーズを二度と口にしたことはなかった¹⁰⁶——が、うまい具合に嵌った、という語弊があるかもしれない。既に本人は亡くなっているから抵抗も弁明もできぬままに言葉だけが独り歩きしたのはやむを得なかったであろう。それは、天心自身にとっては誠に不本意であり不幸なことであった。

出会わなかった天心と滔天

さて、宮崎滔天についても触れておこう。滔天は、竹内好によればその思想信条において「非侵略的なアジア主義者」¹⁰⁷である。竹内を代弁して3類型にアジア主義を分類してみせた中島岳志の言を借りれば、滔天は、「近代に対する衝動的アンチテーゼを内包して」いた「抵抗」のアジア主義者であった。しかし、それは天心の「思想」としてのアジア主義とは結びつかなかった¹⁰⁸。そのように含意して竹内は、「天心と滔天は出会わなかった」¹⁰⁹と書いた。中島はこれに呼応して、「滔天のような純粋なアジア主義的心情が、岡倉天心のような普遍性をもった『アジア思想』へと『昇華』することができなかったことにアジア主義最大の問題点があ」¹¹⁰ったと竹内を補足す

¹⁰³ ニヴェディタについては [木下 2005:249, 329, 349] を参照。併せて木下による天心の英語に対する考え方も見ることができる。

¹⁰⁴ [色川 (編) 1984:10]。

¹⁰⁵ See [Hotta 2007]. 本作は、アジア主義を太平洋戦争 (大東亜戦争) における鍵概念として位置づけた労作である。

¹⁰⁶ [木下 2005:244-245]。

¹⁰⁷ [竹内 1993:337]。

¹⁰⁸ [中島 2014:30-38]。もう一つ (第1) の類型は「政略」としてのアジア主義である。また、[Jansen 1954:4]も滔天について「抵抗の伝統の中で育った」旨述べていることは興味深い。

¹⁰⁹ [竹内 1993:330]。

¹¹⁰ [中島 2014:27]。

る。そして、滔天や「頭山満をはじめとした玄洋社のメンバー」は、「思想を観念的に追求するインテリ世界の中に脆弱性を見出し、そこから意識的に距離を取ろうとした人たち」であった「一方、天心の思想は、滔天のような行動力を伴」わなかった、と述べて、両者が出会えなかったことがアジア主義の発展におけるアポリアなのではないかと問題提起するのである¹¹¹。

筆者が本節冒頭にわざわざ二人の生没年を再び記したのは、たしかに天心と滔天がほぼ同時代を生きただけを示すためである。ところが、二人は終生、接点を持つことはなかった。筆者の考えは、竹内にも中島にも共感するものでありつつ、天心と滔天という二人の生い立ちや交友関係から、両者の間に接点があり得なかった必然性を強調するものだ。本質的に二人は——思想面での共通性もしくは類似性は認められるかもしれないが——出自から歩んだ人生がまるで違う。天心は、先にも述べたように、幼い頃から英語教育に親しみ、満年齢 17 歳半で東京大学を卒業、18 歳で文部省の官吏となった当時の超エリートである。1898（明治 31）年に東京美術学校の校長職を解任されるが、なおも下村観山や菱田春草、横山大観らを育てた日本美術院の創設者・指導者として、華々しい経歴を誇った（美術院の成功は必ずしも長きにわたらなかったが）。

かたや宮崎寅蔵は、そもそも中学校を中退後、徳富蘇峰の大江義塾に始まり、東京に出ては中村正直（1832-1891）の私塾・同人社や東京専門学校に学ぶが、また熊本に戻って正則熊本英語学会へ、ほどなく長崎のミッションスクール加伯利英和学校（Cobleigh Seminary）への編入学と学校を転々とし¹¹²、学歴という意味では、今でいう「落ちこぼれ」である。また、長兄の八郎が西南の役で討死して以来、父長蔵¹¹³による「官の字のつく職に就くべからず」との厳命を兄の民蔵、彌蔵と共に守ってきた。後述するように、寅蔵は、犬養毅との関係から外務省の機密費を使って中国で情報収集活動を単発的にしたことはあるものの、遂に政府の役職に就くことはなかった（1915＝大正 4 年 3 月に衆議院議員選挙に熊本から出馬するが落選する）。

滔天は、自ら浪曲師になったことも含めて、徹底して市井の人であり続けた。これもまた後述するが、彼もまた天心と同じように、相手の人種・性別・職位等に関係なく接することができた人間であったが、その一貫した基本的姿勢は、弱者に寄り添ったところにあった。『三十三年の夢』（以下、『夢』と略）の「自序」には、「人類同胞の義を信ぜり、ゆえに弱肉強食の現状を忌」む自分を「世界革命者」と任じ、また教育の普及が重要だが「社会は不平等」であり「貧者多くして富者少なし」、だから「多数細民の状態を一変」させなければならないので、「社会革命者」とも任ずるに至ったと述べる。また、「人に人種的憎悪の病毒あるを思えり」と述べている¹¹⁴。

そんな滔天が生涯ただ一度給料取りとなったのが、広島に移民斡旋会社のタイ国在留代理人となった時だった。1895 年と 96 年の 2 回、自ら移民を率いてタイへ渡航したが、特にその第 1 回目の道中における中国人労働者（苦力）の様子を描いた一節が『夢』に出てくる。

¹¹¹ [中島 2014:221-222]

¹¹² この間の事情については、主として [近藤 1984:12-24] を参照。なお、加伯利英和学校は、現在の鎮西学院の前身である。

¹¹³ 父長蔵は、肥後藩の下級武士（郷士）で、維新前は長兵衛政賢（正賢とも）と名乗っていた。

¹¹⁴ [宮崎 1993:26-28]。

香港に達し、(中略)幾百の支那労働者は余ら一行と同船せり。これ人の目して禽獣と同視する。いわゆる苦力なるものの一類なり。余が一行の百姓といえどもこれに近づくを欲せざる、一種の汚穢物おかいぶつなり。しかれども余は実に、彼らを熱愛するを禁じ得ざりき。余が一生を託すべき支那国民なりと思えばなり。余が大いに用いて以って人道回復の用をなさしむべき民と思えばなり。しかり、我に敵意なければ、人みな私の味方ならずや。彼ら、なんぞ余に親しむことの速やかなる、なんぞその言動の無邪気なる¹¹⁵。

まさに痛快である。滔天の面目躍如たるものを感じさせる。2回目のタイ渡航(「第二のシャム遠征」)¹¹⁶に至っては一層調子に乗った書きぶりとなるのだが、この第1回目の渡航の時も——禽獣だの汚穢物だのと——たしかに表現は過激であるが、滔天の中国人苦力に対する優しい眼差しが表れているといえるだろう。これを天心に求めることはできただろうか。

天心は滔天、滔天は天心

とはいえ、天心と滔天の二人には驚くほど共通点もまた多かった。ここでは、中国旅行、女性関係、そして両者が具えていた“女性性”(女性的性格)について述べておきたい。

天心は、1893(明治26)年と1906(明治39)年の2回にわたって中国旅行をしている¹¹⁷。天心の関心はもっぱら遺跡と美術品にあり、たとえば洛陽で竜門石窟を見て「忽ちにして喜歓の声を発せしむ」と当時の日記に記した。中国の奥地を踏査するのに、支那服に辮髪を付けて清国人になりすましたというが、滔天も同じようなことを試みている。むしろ辮髪にして横浜の中国商館に潜入して中国人に成りすましたのは次兄の彌蔵だったが、志半ばで急逝した彌蔵の遺志を継いで中国革命に身を投じていった滔天も、いずれ辮髪にするつもりで髪を伸ばし放題にしていた。犬養毅に初めて会った際、「その髪はなぜ伸ばしておるのか、さぞ五月蠅いだろうに」と訊かれて、最初は「物好きに」と適当に答えたが、滔天に何か真意があると感づいた犬養が執拗に「その顔では金儲けはできない」などと食い下がるので、遂に中国革命への志を打ち明けた、というエピソードがある¹¹⁸。

滔天は、その後、犬養からの資金援助(外務省の機密費)を得て1897(明治30)年7月、中国に「秘密結社の調査」のために行くが、探していた孫逸仙(孫文)が欧州から日本に行くという9月には帰ってきてしまう。生涯最初の上海行き(1891年)も含めると、滔天は通算で中国に(香港、シンガポールを含めて)10回以上渡航するのであるが、美術品や遺跡を見て回った形跡はなく、ひたすら革命運動のために人と接触することが目的の旅行であった。しかし、中国に入り込み中国を深く理解しようとした点では、そのアプローチは違えども二人には大いに共通性があったといえるだろう。滔天の中国行については本稿後編で詳しく述べる。

次に女性関係である。正確には、酒と女と言った方がよいかもしれない。木下は、「酒と女を抜

¹¹⁵ [宮崎 1993:108-109]。

¹¹⁶ 特に [宮崎 1993:135-139]。

¹¹⁷ 天心の中国旅行については、[色川(編) 1984:26-28]、[木下 2005:xii、170-175]を参照。

¹¹⁸ [宮崎 1993:162-163]。

いて、岡倉覚三の生活はありえなかった」¹¹⁹と書き、中島は、天心には「時折、女性に対する甘えと厭世観から来る逃亡癖のようなものが見られ」¹²⁰たと書いている。その点においては滔天も全く負けていないのだが、まずは天心について見ていこう。「岡倉は、ことあるごとに生徒たちや教員と大酒を煽り、高歌放吟し女郎屋へ走った」¹²¹——こうした行動は当時にして既に、美術家たる者の品性を著しく欠くとして批難の対象となった。その品性あるいは品位に欠く所業の一つとして指摘されたのが、天心の私的な女性関係だった。彼の東京美術学校校長非職（解任）に至る経緯と、男爵九鬼隆一の元妻星崎波津子との不倫関係については、本稿で詳しく触れる余裕も必要もないが、詳しくは、たとえば木下が彼の著書に1節を割いて詳細に説明した「岡倉覚三をめぐる〈女〉たち」を参照されたい。波津子だけでなく、「岡倉の生涯には、その時代時代に、なんにんかの女性の影がいつも漂って」いた。そこには妻・基子（もと）以外の女性6名が列挙され、その他にも「心を通わせた」かもしれない数名の名も挙がっている¹²²。

一方の滔天も、『夢』の中でも繰り返し酒と女については書いているが、とにかく女性にはもてたようだ。詳細は、たとえば高野澄の伝記などに譲りたいが、留香という芸者のことや、後に次女として認知する娘リツを産んだ柿沼トヨのことについては触れておいてもよいだろう。

留香は藤井トメという名らしいがそれ以上は不詳とされる¹²³。1898（明治31）年8月、滔天は犬養の出資を得て二度目の中国調査旅行に出掛け、孫文と提携させる目的で香港から康有為を伴って帰国する（が提携には失敗）。その10月以降、しばらく身を寄せることとなった京橋区木挽町（当時）の松栄亭という待合で出会うのが留香である。その後、失意の中で浪曲師となる滔天は、1902（明治35）年の夏頃まで、（金もないのに）松栄、さらにはこの芸者とその母親が住む家に身を寄せ続けたのであった。一方の柿沼トヨは、曲鶯という芸名を持つ当時20歳の女芸人であった。同じ年の後半、滔天は自らの興行会社「易水社」を旗揚げする。彼女はそこに「しばしば米を運んできてくれた恩人」であった。滔天は、その「恩義に報いるに恋をもってして」トヨを妊娠させる¹²⁴。浪曲師として九州巡業に出た1903（明治36）年、長崎で女兒が（巡業中の楽屋で）生まれる。しかし、その曲鶯ことトヨとも1905（明治38）年には別れている。

それにしても、天心の妻基子（もと）も、滔天の妻槌子（つち）も、共に放蕩を繰り返す夫を我慢強く支え続けたものである。明治の日本女性とは——また男性も——そういうものだった、といえればそれまでだろうが、滔天の妻槌子に至っては、極貧生活の中でリツを引き取って実の娘同様に次女として育てている。天心も異母姉の子である八杉貞との間に子を設けた（が、こちらの養育は貞と結婚した早崎稔吉の両名に委ねられた）。さらに家族関係でいえば、天心の長男一雄、滔天の長男龍介、それぞれに一角の人物となったが、共に父を大変に慕っただけでなく、父親に関する資料的な価値のある文章（岡倉一雄『父天心』、宮崎龍介「父滔天のことども」など）を後世に残したことも、また共通点といえる。

¹¹⁹ [木下 2005:192]。

¹²⁰ [中島 2014:206]。

¹²¹ [木下 2005:191]、また [色川（編）1984:24-26]、[木下 2005:344-346] も参照。

¹²² [木下 2005:328-343]。

¹²³ [宮崎 1993:420, 注二一七 8]。

¹²⁴ [高野 1990:246-254]。

さて、最後に述べる二人の共通点は、共に極めて女性的な面があったことだ。木下曰く、「岡倉は、詩意識のレヴェルではいともたやすく<女>になることができた。」最後の作品となったオペラの台本『白狐』(The White Fox)の「主人公の雌狐に自意識の分身を托した」と分析している¹²⁵。

滔天は自身について、「^{つらつらおも}熟 惟んみるに、私と云ふものは、女性的性分を享け得て、誤って男子に生まれた一種の変性漢です。酒の援助なくしては、人様の前に自分の意思を言明することも能くせず、成るべくは人様の御意見に譲歩して、其人の満足をもて自ら満足せんとする弱虫なのです」¹²⁶などと書いている。このような文章に、彼の本質的に屈折した、繊細な人間性を垣間見ることができると思う。若い頃には学校を転々としてたり（退学するたびに彼は理屈をつけてはいたが）、私財をなげうって中国革命に身を投じてみたり、浪曲師になってみたり、また、革命後に袁世凱から持ちかけられた利権話（米穀輸出権）はきっぱり断ったりと、「滔天には終生どこかにこうした遁世的姿勢が顔をのぞかせている」¹²⁷。渡辺京二は、「彼の生涯を通観するとき、挫折へのあるのびきならぬ衝動、いいかえれば、自己を成功とは逆の位相へひきおろして行こうという衝迫が彼の一生をくりかえしくりかえし襲っている」といい、それは「体質的生理的なものであり、より直截的にいきまえば、ある原罪的な自己破却の衝動である」と分析する¹²⁸。

その他にも天心と滔天の類似点を挙げるならば、まず、共に波乱の生涯を約 50 年で終えたことである（天心 50 歳、滔天 52 歳）。死因も、腎臓病に尿毒合併症を併発とほぼ同じだった。また、天心は西洋音楽をこよなく愛し、造詣も深かった。滔天も歌舞音曲の類は何でも好きだった（余、性声曲をよろこぶ¹²⁹）。エリートで博識で国際的教養人でありながら、奇抜で型破りで酒好き女好き、反逆の精神に富みつつ詩的で女性的な繊細さも持ち合わせた天心岡倉覚三。かたや「侠の人」と見られがちな——事実その面もあったが——滔天宮崎寅蔵もまた、天心と同様に酒好き女好きながら、その一見豪放磊落そうな外見からは想像もつかない、良く言えばデリケートさ、悪く言えば女々しさを持った、そして何よりも知性の人であった。さらに、渡辺京二が評するように、滔天に「政治的人間あるいは行動的人間よりも、むしろ芸術家的な気質の人間の存在を認める」¹³⁰ならば、アジア主義という狭い観点に囚われず人間としての天心と滔天の二人が歴史上に果たした役割とは、それぞれの置かれた境遇において唯一無二のものであったとえいえるのではないか。竹内好に準えていうならば、つまり、天心は滔天であり、滔天は天心であった。（二・完に続く）

¹²⁵ [木下 2005:347-348]。

¹²⁶ 原文は「炬燵の中より」『上海日日新聞』大正 8（1919）年 2 月 15 日付。[宮崎 2006a:161] および [渡辺 2006:28]（引用）を参照。

¹²⁷ [近藤 1984:18]。

¹²⁸ [渡辺 2006:17]。

¹²⁹ 『三十三年の夢』の自序の冒頭。[宮崎 1993:25]。キリスト教に入信したきっかけは、オルガンと讚美歌の音色に導かれて教会を訪ねたことだった。[宮崎 1993:49] を参照。

¹³⁰ [渡辺 2006:14]。

参考文献・資料一覧（今号分）

- 葦津珍彦（2007）『大アジア主義と頭山満』（葦津事務所）
- 飛鳥井雅道（1999）『中江兆民』（吉川弘文館）
- 井上寿一（2006）『アジア主義を問いなおす』（ちくま新書）
- 色川大吉（編）（1984）『岡倉天心』（中公バックス 日本の名著 39）
- 上村希美雄（2001）『龍のごとく——宮崎滔天伝』（葦書房）
- 衛藤藩吉（2003a）『衛藤藩吉著作集』第4巻「眠れる獅子」（東方書店）
- 衛藤藩吉（2003b）『衛藤藩吉著作集』第7巻「日本人と中国」（東方書店）
- 衛藤藩吉（2004a）『衛藤藩吉著作集』第1巻「近代中国政治研究」（東方書店）
- 衛藤藩吉（2004b）『衛藤藩吉著作集』第3巻「二十世紀日中関係史」（東方書店）
- 木下長宏（2005）『岡倉天心——物ニ観ズレバ竟ニ吾無シ』（ミネルヴァ書房）
- 小林よしのり（2014）『ゴーマニズム宣言 Special 大東亜論 巨傑誕生篇』（小学館）
- （2015）『ゴーマニズム宣言 Special 大東亜論 第二部 愛国志士、決起ス』（小学館）
- （2017）『ゴーマニズム宣言 Special 大東亜論 第三部 明治日本を作った男達』（小学館）
- 近藤秀樹（1984）『宮崎滔天 北一輝』（中公バックス 日本の名著 45）（中央公論社）
- 嵯峨隆（2006）「孫文の大アジア主義と日本——『大アジア主義』講演との関連で」『法学研究』（慶應義塾大学法学研究会）79巻4号、27-59.
- （2015）「東亜連盟運動と中国」『法学研究』（慶應義塾大学法学研究会）88巻8号、51-86.
- 書肆心水（編）（2008）『アジア主義者たちの声（中）——革命評論社、あるいは中国革命への関与と蹉跎 宮崎滔天、萱野長知、北一輝』（書肆心水）
- スピルマン、クリストファー・W・A（2015）『近代日本の革新論とアジア主義——北一輝、大川周明、満川亀太郎らの思想と行動』（芦書房）
- 高野澄（1990）『伝 宮崎滔天——日中の懸橋』（徳間文庫）
- 高埜健（2009）『「東アジア」という地域秩序——共同体構築を追求する ASEAN と東アジア首脳会議』山本信人（編著）『東南アジアからの問いかけ』第4章所収、121-148.
- （2012）「東アジア地域主義とは何か——日本にとってのインプリケーション」『アドミニストレーション』（熊本県立大学総合管理学会）18巻3・4合併号、221-257.
- 竹内好（1993）『日本とアジア』（ちくま学芸文庫）
- 坪内隆彦（2011）『維新と興亜に駆けた日本人——今こそ知っておきたい二十人の志士たち』（展転社）
- 頭山統一（1977）『筑前玄洋社』（葦書房）
- 中島岳志（2014）『アジア主義——その先の近代へ』（潮出版社）
- 橋川文三（1962）『アジア解放の夢』（記録現代史 日本の百年 第7巻）（筑摩書房）
- 松本健一（2000）『竹内好「日本のアジア主義」精読』（岩波現代文庫）
- 宮崎滔天（宮崎龍介、衛藤藩吉校注）（1967）『三十三年の夢』（東洋文庫）
- （島田虔次・近藤秀樹校注）（1993）『三十三年の夢』（岩波文庫）
- （2006a）『アジア革命奇譚集』（書肆心水）

- (2006b) 『滔天文選——近代日本の狂と夢』 (書肆心水)
- 山本吉宣、羽場久美子、押村高 (編著) (2012) 『国際政治から考える 東アジア共同体』 (ミネルヴァ書房)
- 夢野久作 (杉山泰道) (2015) 『近世快人伝』 (文春学藝ライブラリー)
- 劉峰 (2013) 『近代日本の「アジア主義」』 (千葉大学大学院人文社会科学研究所後期博士課程提出論文) mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/thesis/IBA_0019.pdf (2015年11月15日確認)
- 渡辺京二 (2006) 『評伝 宮崎滔天 (新版)』 (書肆心水)
- Ba, Alice D. (ed.) (2009), *[Re]Negotiating East and Southeast Asia: Region, Regionalism, and the Association of Southeast Asian Nations* (Stanford, CA: Stanford University Press)
- Buzan, Barry and Yongjin Zhang (eds.) (2014), *Contesting International Society in East Asia* (Cambridge: Cambridge University Press).
- Goh, Evelyn (2013), *The Struggle for Power: Hegemony, Hierarchy, and Transition in Post Cold-War East Asia* (Oxford: Oxford University Press).
- Hotta, Eri (2007), *Pan-Asianism and Japan's War 1931-1945* (New York: Palgrave Macmillan).
- Jansen, Marius B. (1954), *The Japanese and Sun Yat-Sen* (Stanford, CA: Stanford University Press)
- Katzenstein, Peter and Takashi Shiraishi (eds.) (1997), *Network Power: Japan and Asia* (Ithaca and London: Cornell University Press).
- Khoo, Salma Nasution (2008), *Sun Yat Sen in Penang* (Penang: Areca Books).
- Mahabubani, Kishore (2008), *The New Asian Hemisphere: The Irresistible Shift of Global Power to the East* (New York: Public Affairs).
- Rozman, Gilbert (ed.) (2015), *Misunderstanding Asia: International Relations Theory and Asian Studies over half a century* (New York: Palgrave Macmillan).
- Saalar, Sven and J. Victor Koschmann (eds.) (2007), *Pan-Asianism in Modern Japanese History: Colonialism, regionalism, and borders* (London and New York: Routledge).

付記: 本稿の作成にあたっては、平成26年度熊本県立大学学長交付金(「現代アジア主義の研究」[主査・上拂耕生准教授=当時])の一部を使わせていただいた。ここに記して感謝申し上げます。